

文様染の系譜 (4)

平安時代の文様染はどちらかと言えば低調であった。我が国は奈良時代から平安時代にかけて、隋、唐の文化に倣い、政治には律令制度を積極的に取り入れ、公家の着衣は位階によって、細かく定められていた。唐の宮廷が織物中心の世界であったので、我が国もそれに倣い、文織物の衣冠を着け朝儀に参じた。しかし文様染も全く行われなかったのではなく、摺り文、纈纈、夾纈等は絶やすことなく行われていた。

鎌倉時代を経て室町時代になると、公家に代わって武士が台頭する。建築様式は寝殿造りから書院造りとなり、生活様式そのものも変化し簡略化された。それまで下着であった小袖が表着となり、これに直接絞り染をしたり、型染を行ったりした。公家社会では絹織物が多かったが、武家の社会では酷使に耐える麻やその他の韌皮繊維が多く用いられた。

桃山時代から江戸時代初期にかけて盛んに染められた辻が花染は、正倉院御物を原点とする彩絵と絞り染がコラボレートしたものである。

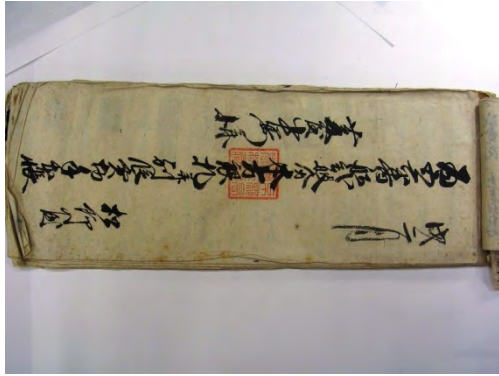
中世の武士は戦場が稼ぎどころである。目立つ姿で武勲を誇示しなければならない。それに当時武士の間に流行した娑婆羅の風潮も相俟って、目立つこと、注目されることに共感を呼び、一躍文様染が注目されるようになった。

先に、ポルトガル、オランダ、中国の船が海外の珍しい染物や織物をわが国に運び込んだこと、そして其のうち文様染の織物を更紗と呼ぶことを記した。更紗は奇抜な文様と配色が日本人の興味を引き珍重されたが、その輸入量は少なく到底需要を満たすことは出来なかった。

江戸時代初期から中期にかけて、京都の染色業は細分化され、その記録が残っているが、それによると、紺屋、^{べにし}紅師、茶染師、紫師、に交じって^{しゃむろし}紗室師が見える☆ⁱ。紗室師とは更紗を染める職人を指すものと思うが、詳しいことは分からない。いずれにしても需要があるのだから、それに答える職人が現れるのは当然だが、多分手書き更紗で生産量も少なく、量産されるようになるのは、江戸中期から後期にかけて出現する和更紗を待たねばならない。

京都工芸繊維大学美術工芸資料館には、通称オランダ更紗と呼ばれるコレクションがある。寛永の鎖国以降、長崎はオランダ船と中国船を迎え入れる唯一の公的な国際貿易都市となった。この長崎を窓口として入って来た人と物と情報は、時の中央権力である江戸幕府の管理下に置かれた。物即ち輸入品は、各種の手続きを経て、日本側の役人である目利きによって鑑定、評価が下され国内市場に流通した。輸入反物に関しては、反物目利きと呼ばれる役人によって鑑定、評価され、同時に作成された「端物切本帳」等と称する資料が、公立博物館、個人コレクター等に所蔵されている☆ⁱⁱ。京都工芸繊維大学美術工芸資料館は、AN-71 阿蘭陀輸入品古裂地見本帳裂地見本 8 冊 (図 1 ~ 4 参照)、AN-90 紅毛船端物切本帳 1 9 冊の 2 点計 2 7 冊を所蔵する。1 冊は半紙を横二つ折りし、AN-71 では平均 42.5 枚、85 頁を和綴にした帳面に、更紗の場合はヨコ 1.2 センチタテ 3 センチほどの切れ見本を 1 ブロック 10 枚程、1 ページに 2、3 ブロック添付している。更紗に関する資料の頁数は全体の約 1 0 % であるが、切れ見本数は多い。殆ど江戸末期 (1850 ~ 1860) の記録で、その中に大量の尺長更紗が含まれている。1 反 8 丈何尺等と記したものもあるが、これも不揃いである。サンプルが小さくて判然としないが高級なものは少なく、ヨーロッパ

のどこかでローラー捺染機で生産したものであろう。



図一 1 阿蘭陀更紗表紙
京都工芸繊維大学美術工芸
資料館蔵 AN-71



図一 2 阿蘭陀更紗
京都工芸繊維大学美術工芸
資料館蔵 AN-71



図一 3 阿蘭陀更紗
京都工芸繊維大学美術工芸
資料館蔵 AN-71



図一 4 阿蘭陀更紗
京都工芸繊維大学美術工
芸資料館蔵 AN-71

この時期捺染の先進国イギリスやフランスでは、高級捺染はインテリア関係のものが多かったが、日本では全く需要がなくむしろ衣料用のものが好まれ、それに相応しいものが運び込まれたのであろう。中にはマシーングランドの繊細な文様もあり、日本人には非常に珍しく、モダンな印象を与えたのかも知れない。素材は綿の金巾が多く薄手のローンや変わり織もある。

江戸時代中期には、消費の主流は特権階級から町人へと移り、江戸末期には、綿の栽培が近畿の河内平野周辺で活発に行われるようになると、需要に答えて更紗の国内生産が始まった。和更紗である。

かつての貿易港で綿の産地河内平野が控え、紗室師もいる染めの本場京都に近い堺で、更紗の国産化が始まるのは自然の推移である。当初手書きであったものが、納期の都合などから、次第に弁柄、代赭、黄土、藍蠟、群青等の顔料を型紙で摺り込む技法を採るようになった。鍋島更紗は佐賀鍋島藩の庇護のもと、鍋島焼等と共に藩の御用品として作られたものである。括りの黒線だけ木版を用いるのが特色で、彩色は型紙を用い顔料を摺り込んでいる。貿易港である長崎では、天明年間（1781～89）に更紗を作り始めたと言われる。

人物模様が多く、蘇芳と明礬を合わせて泥状にしたやや茶色掛った赤色を縁取りに差すのが特色とされる☆ⁱⁱⁱ。いずれにせよ和更紗は染料ではなく顔料を使用しており、インド更紗のように強く洗濯することは適わず、あまり洗濯することのない布団地、風呂敷、油単（布に油をしみ込ませたもので、湿気や汚れを防ぐための覆いとして使用された）等に用いた。その為、プリント柄の蒲団地は今でも更紗と呼ぶ。現在のように、包装紙やパッキングケースの無かった時代は、大小の風呂敷は重宝であった。道具類は風呂敷に包み、蔵の中で整理して保存したと聞く。

話は少し横道にそれるが、江戸錦絵の中で描かれた子供の晴れ着と、寝装具について触れておきたい。先に少し触れた江戸錦絵、俗に言う浮世絵は木版印刷の一種である。とはいえ、色数が多く、型合わせが正確で、紙に湿度をもたせ、入念に摺りを行うので、色が紙背にまで浸透し、異国の印刷に比べ、抜群の発色と落ち着きを醸し出す。江戸錦絵は江戸の最新情報を地方に伝える貴重な媒体で、旅人は必ず江戸錦絵を土産に持ち帰る。当時吉原のスター花魁が、どのような髪形や化粧をし、どのような文様の着物や帯を、どのように身につけたか、事細かに絵に描いて伝達した。他に対象になるのは市井の美女、歌舞伎、相撲、花鳥風月、暦、狂歌、東海道、富士観光等テーマは江戸を離れ、当時流行のツアーにまで及んだ。当時の子ども衣料については子供絵、寝装具の情報については春画でその詳細を知ることが出来る。



図-5 子供絵
江戸の子供たち
くもん子ども研究所蔵



図-6 子供絵
江戸の子供たち
くもん子ども研究所蔵



図-7 子供絵
江戸の子供たち
くもん子ども研究所蔵

子供絵は、今まで研究者やマニアの間で殆ど話題にならなかったが、1985年鈴木重三が子供絵について「近世子供絵考序説」を発表して、江戸錦絵のジャンルの1つとしてその地位を確立した。

同時に「くもん子ども研究所」が子供絵の収集と研究を開始し、それを収録した「浮世絵の中の子どもたち」を発売すると共に、国内外で盛大に展覧会を開き、日本の子供が江戸時代いかに学び、いかに遊んだかを、世界に衆知せしめた☆^{iv}。この図鑑で見る限り、更紗の着物を着た子が沢山いる。ここに登場する子供たちは殆ど江戸の町人の子であるように見受けられる。祭りか年中行事のために、親が苦勞して整えた晴れ着かも知れない。

いずれにしても日常普段着とは思えない、はれの日にはこの様に着飾ったのであろう。子供の招福、除災を願う親心と、海外（中国）流行情報の積極的な摂取が見られる☆^v子供たちは屈託なく遊びに興じており、汚れることなど全く気にしていない。行事が終わり汚

れた晴れ着はどうしたのだろうか、多分洗わず来年は弟や妹がそのまま着たのではないか
思う。

江戸錦絵のジャンルに春画がある。上質の物は誰でも名を聞けば知っている一流の絵師
の作品に多く、春信、清信、歌麿、北斎、豊国、国芳、英泉等が独自の画風で、春画の作
品を残している。寝室や小道具が細部に至るまで細かに描写されているが、ここでは蒲団、
夜着、寝巻、長襦袢に注目したい。



図-8 絵本 開中鏡

一般に敷布団、掛け布
団共に文様染の布を用い、
二人がゆっくり寝られる
位十分な大きさに仕立て
られている。現在の様に
蒲団に敷布や包布は用い
ないで、そのまま直接横
になる。関西人には馴染
みがないが、当時の江戸
では夜着または搔巻と呼
ぶ袖付きの掛け布団を使
っている。男女同柄色違
い等、粋な計らいが見受
けられる。歌川系の家元
豊国の『絵本開中鏡』(文
政6年1823版)の図では、
敷布団は唐草文様を型置

きして、薄色に藍染したものである。男女共に更紗文様の着衣がある（夜着か着物か分か
らない）。画面奥に大柄の更紗の掛け布団が見える。☆^{vi}

以上述べたように、文様染の系譜は海外の技術を適当に取り入れながら、日本国内で、
千数百年の歳月をかけて醸成し、摺りの技術を展開して、世界に類の無い文様染を完成し
た。しかし、産業革命の洗礼を受けてない日本の文様染は、鎖国の終結とともにヨーロッ
パの先進技術を導入し、手工業から機械工業へと転身を図ることになる。

(註) ☆

ⁱ 日本絹人絹織物史 昭和34年2月25日 婦人画報 P-66

ⁱⁱ 紅毛船端物切本帳について 東京国立博物館美術誌3月号 No. 456
小笠原小枝 石田千尋

ⁱⁱⁱ 和更紗の文様染 吉岡幸雄 紫紅社 P-253

^{iv} 浮世絵に見る江戸の子どもたち 中城正堯 小学館 2000.11.20 P-5

^v 浮世絵に見る江戸の子どもたち 中城正堯 小学館 2000.11.20 P-210

^{vi} 春画に見る江戸の性戯考 白石敬彦
(株)学研パブリッシング 2010.10.12 P-114